

『戦争と性暴力の比較史に向けて』

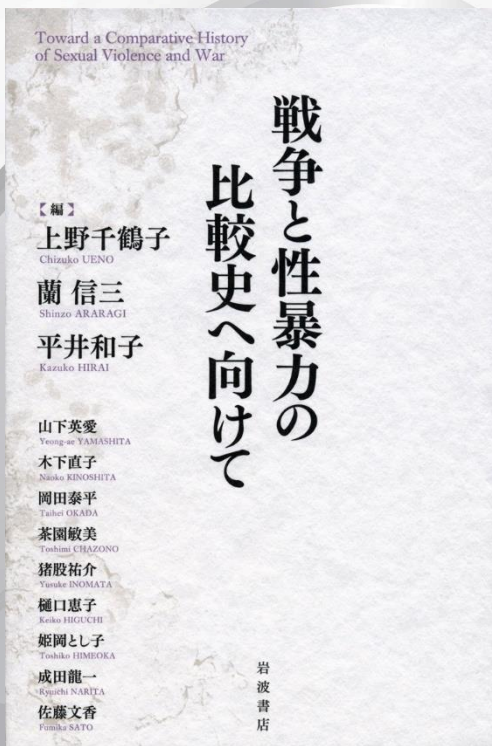
(上野千鶴子・蘭信三・平井和子(編)岩波書店、2018年)

刊行記念シンポジウム

2018年7月21日(土)13:00~16:00

立命館大学衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム

※参加無料・事前予約不要・使用言語日本語



プログラム

総合司会 西成彦(立命館大学)

13:00 趣旨説明 西成彦

13:10 - 14:10 コメント

古久保さくら(大阪市立大学)

栗山雄佑(立命館大学)

中川成美(立命館大学)

井野瀬久美恵(甲南大学)

14:10 - 15:00 執筆者リプライ

15:00 - 15:10 休憩

15:10 - 16:00 総合討論

閉会挨拶 上野千鶴子

コメンテーター・プロフィール

- ◆古久保さくら◆ジェンダー平等教育・ジェンダー近現代史。『架橋するフェミニズム 歴史・性・暴力』(共著)(松香堂、2018年、電子出版)
- ◆栗山雄佑◆日本近現代文学・沖縄文学／性暴力の記憶と語りについて。「目取真俊「希望」論——動員される少女の犠牲について——」(『立命館文学』652号、2017年)
- ◆中川成美◆日本近現代文学・文化。『戦争をよむ—70冊の小説案内』(岩波新書、2017年)
- ◆井野瀬久美恵◆イギリス近現代史・帝国史 ジェンダーと知のネットワーク分析。『大英帝国という経験』(講談社学術文庫、2017年)

主催:立命館大学国際言語文化研究所 ジェンダー研究会

お問い合わせ:立命館大学国際言語文化研究所

Tel:075-465-8164 E-mail:genbun@st.ritsumei.ac.jp

～女性のエイジェンシー(行為主体性)を否定せずに 戦争と性暴力を問題化することはいかに可能か～

上野千鶴子・蘭信三・平井和子 編

『戦争と性暴力の比較史へ向けて』(岩波書店、2018年2月)

本の内容

戦争における性暴力を当然視・許容する語りに抗しつつ、また、生存戦略として行使される女性のエイジェンシー(行為主体性)を否定せずに、戦争と性暴力を問題化することはいかに可能か。性暴力当事者間の関係性のグラデーション(敵味方/同盟国/占領地/植民地、強姦/売買春/取引/恋愛/結婚)に注目し、さまざまな時代背景のなかでどのような加害・被害の語りが社会的に許容されるか、また、時期によって語りと聞き取りがいかに変遷するかを、さまざまな事例を比較して分析する。

目次

はじめに 編者
序章 戦争と性暴力の比較史の視座 上野千鶴子

第Ⅰ部 「慰安婦」の語られ方

第1章 韓国の「慰安婦」証言聞き取り作業の歴史
——記憶と再現をめぐる取り組み 山下英愛
第2章 「強制連行」言説と日本人「慰安婦」の不可視化 木下直子
第3章 日本軍「慰安婦」制度と性暴力——強制性と合法性をめぐる葛藤 岡田泰平
第4章 兵士と男性性——「慰安所」へ行った兵士／行かなかった兵士 平井和子

第Ⅱ部 語り得ない記憶

第5章 セックスというコンタクト・ゾーン——日本占領の経験から 茶園敏美
第6章 語り出した性暴力被害者——満洲引揚者の犠牲者言説を読み解く 猪股祐介
第7章 引揚女性の「不法妊娠」と戦後日本の「中絶の自由」 樋口恵子
第8章 ナチ・ドイツの性暴力はいかに不可視化されたか
——強制収容所内売春施設を中心として 姫岡とし子

第Ⅲ部 歴史学への挑戦

第9章 性暴力と日本近代歴史学——「出会い」と「出会いそこね」 成田龍一
第10章 戦時性暴力被害を聞き取るということ
——『黄土の村の性暴力』を手がかりに 蘭信三
第11章 戦争と性暴力——語りの正統性をめぐって 佐藤文香

あとがき 編者